

Have a good day tomorrow. Tagajo

第15話 書道の甲子園



第15話はWebsite「あしたが上々」でドキュメンタリー映像公開中です。



多賀城市

あしたが上々

このまちの宝はここで暮らす人々。

多賀城の明日を輝かせる、未来へつなぐ20個のタネ。



「あしたが上々」は市制施行50周年を記念し、20人のストーリーを通して多賀城市の明日を創造する4号限定の季刊紙です
多賀城市市長公室市民文化創造担当 985-8531 宮城県多賀城市中央2-1-1 022-368-1141(内線262) sozo@city.tagajo.miyagi.jp

あしたが上々

3号

第11話 生まれ変わっても漫画家
第12話 いつも写真はわたしに寄り添う
第13話 多賀城の守り神
第14話 東北の歴史へのこだわり
第15話 書道の甲子園

ashitagajojo.jp @ f t

第11話 生まれ変わっても漫画家



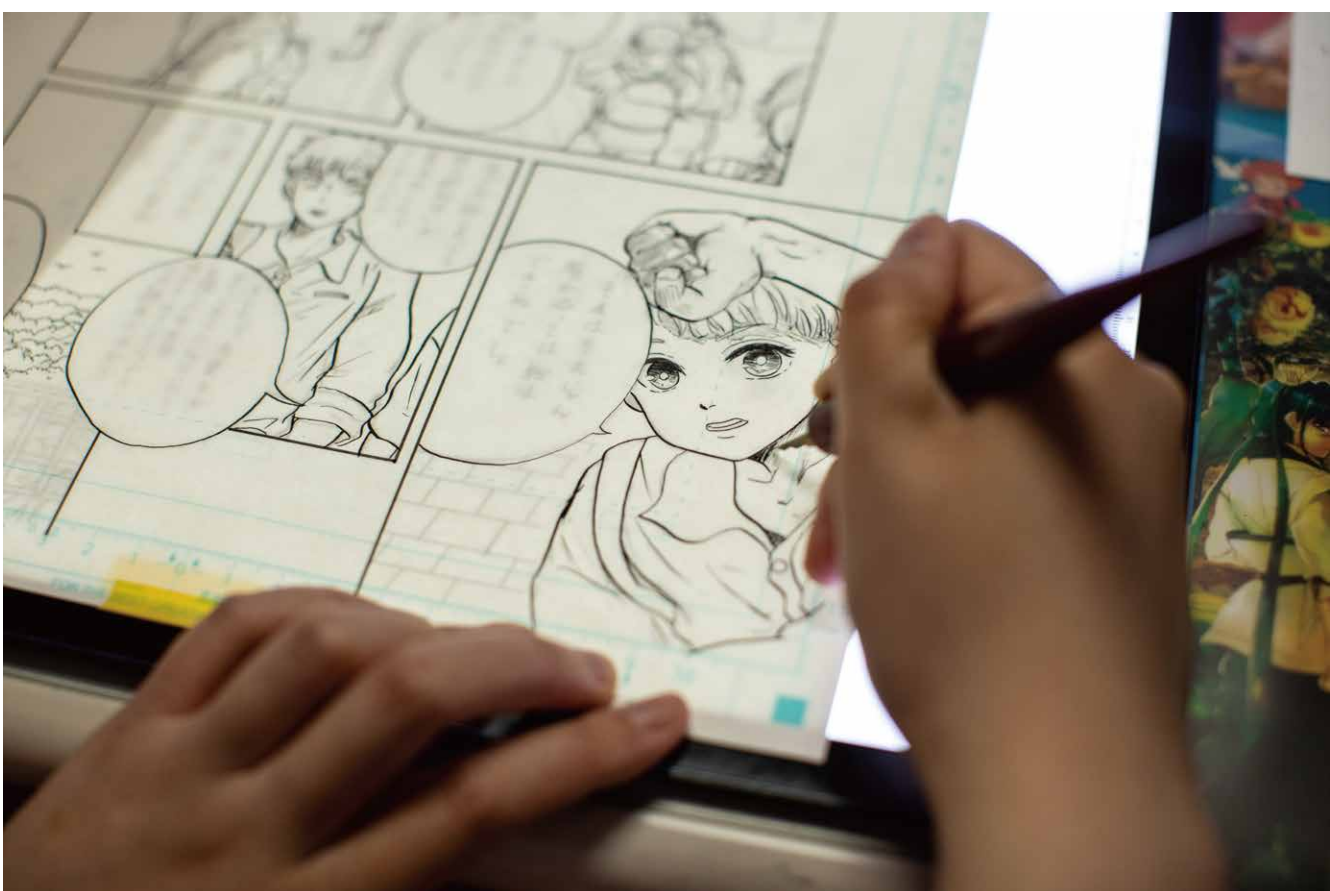


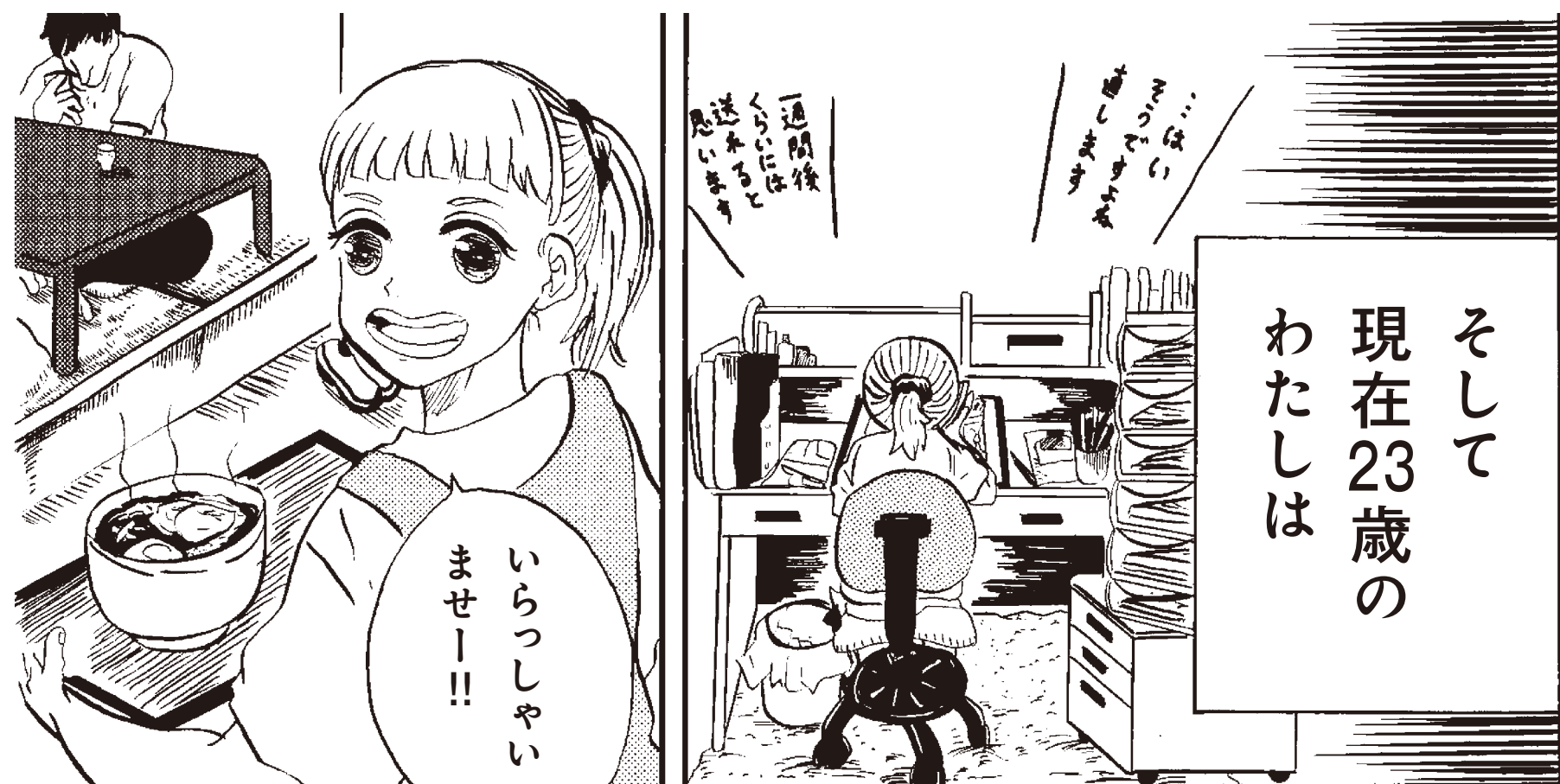
丹藤涼花／平成9年生まれ。漫画家の卵。漫画家を志す前に偶然受けた芸能事務所のオーディションで審査員特別賞を受賞し、声優・女優として芸能事務所に所属した経歴を持つ。一番好きな場所は漫画とフィギュアに囲まれた自分の部屋。

絵を描くのは嫌いだったんですけど、小学5年生の時に週刊少年ジャンプで連載されていた「HUNTER×HUNTER」という漫画に衝撃を受けて、そこから自分も描きたいなって思い始めて、その頃から独学でここまでやって来ました。

原稿に描いて出版社に持ち込むようになったのは、ここ2、3年なんです。それまでは、ずっと趣味みたいな感じで描いていたんですが、漫画を描いている時間が一番楽しくて、他のこと忘れられるし自分の世界観の中で生きていられるなって。最初はダメ元で持ち込みました。そうしたら「担当になりたい」って名刺渡されて、そこから担当が付いたんです。他の出版社にも投稿したら電話が来て「個人的に丹藤さんの作品が好きなので、これから一緒に作って行きませんか」と言ってもらえて。今はその担当の方とやりとりしながら作品を作っています。

漫画家になるために一番重要なのは担当が付くかどうか。担当が付かないと漫画家は始まらないので、早めにスタートラインには立てました。賞を取って掲載されたらデビューになります。





いらっしやい
ませー!!

そして
現在23歳の
わたしは



多賀城市の
ラーメン屋で
アルバイトをしながら
担当さんと
打ち合わせをしたり



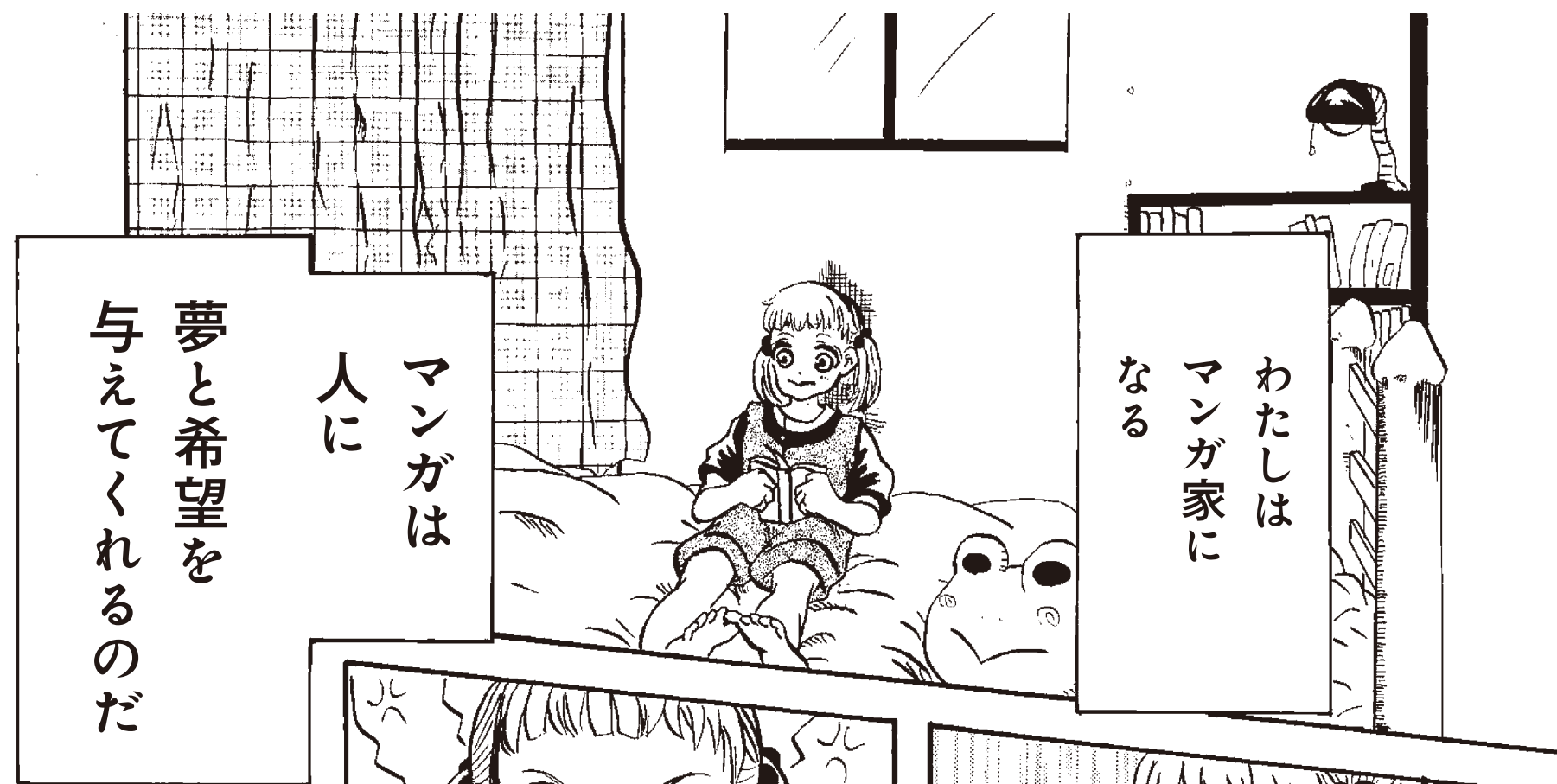
〇〇さん5ページ目
主人公の髪の毛
ベタ塗り
お願いします

〇〇さん7ページ目
トーン1061
お願いします

これがわたしの
近い将来なるであろう
未来想像図である

先生!
原稿まだですか!?
もう時間ない
ですよ!!?

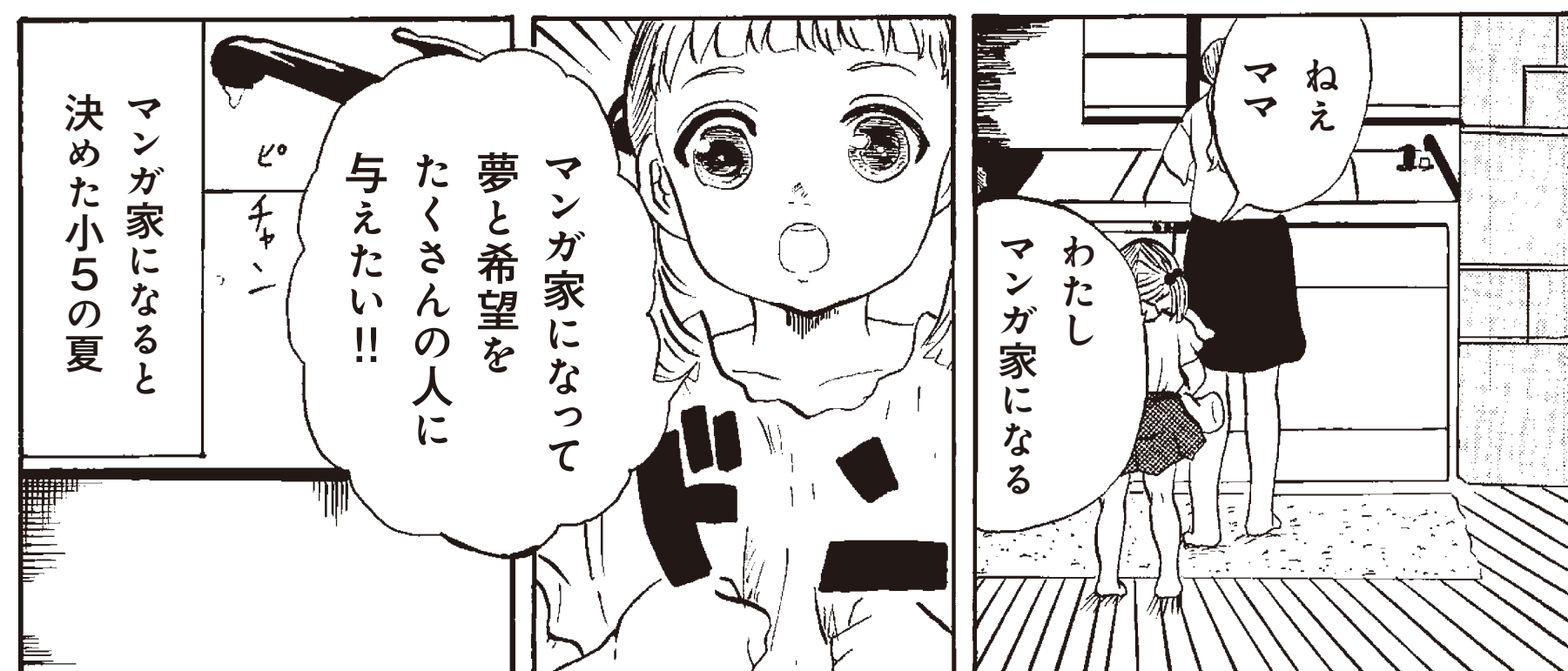
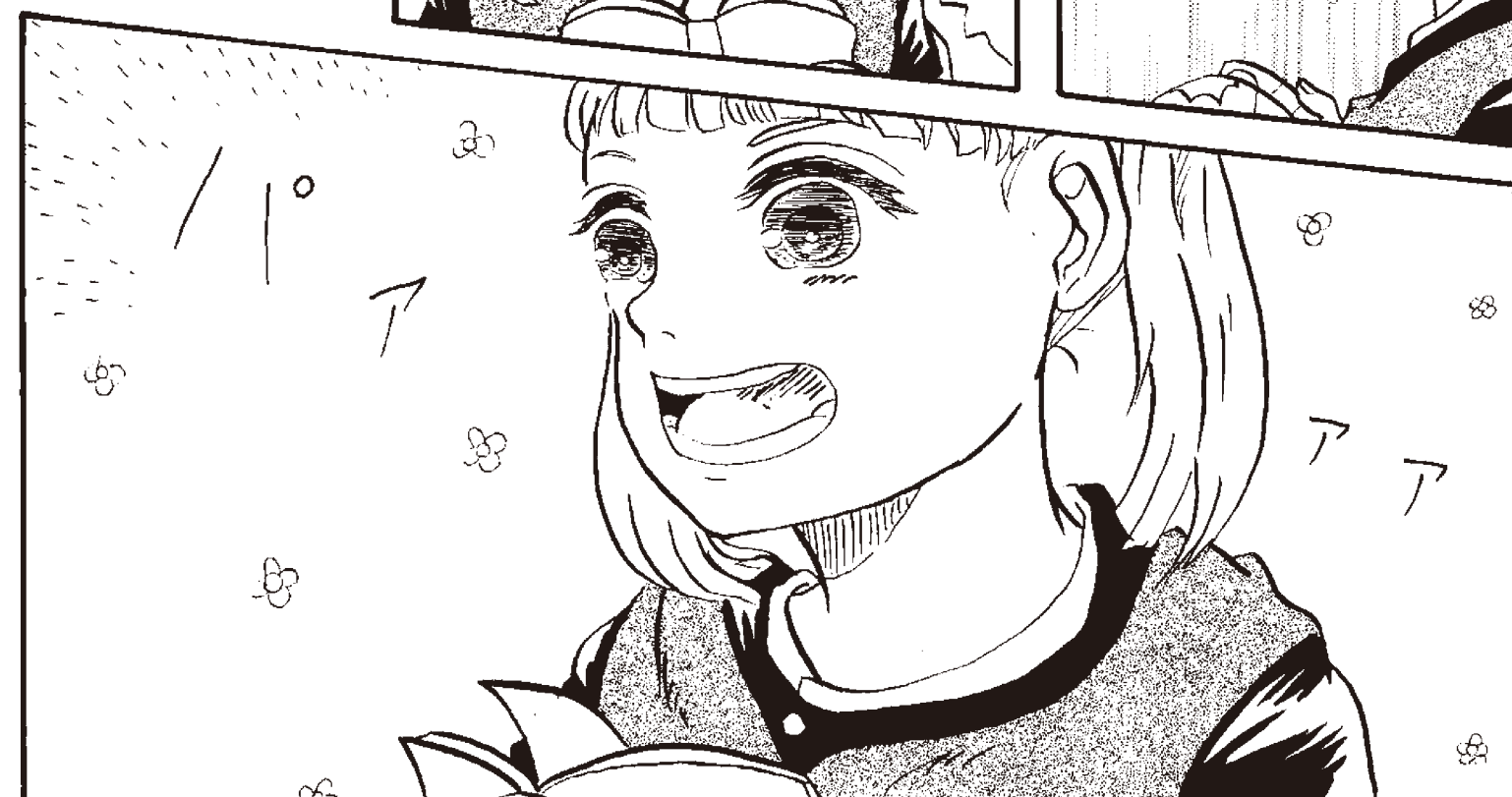
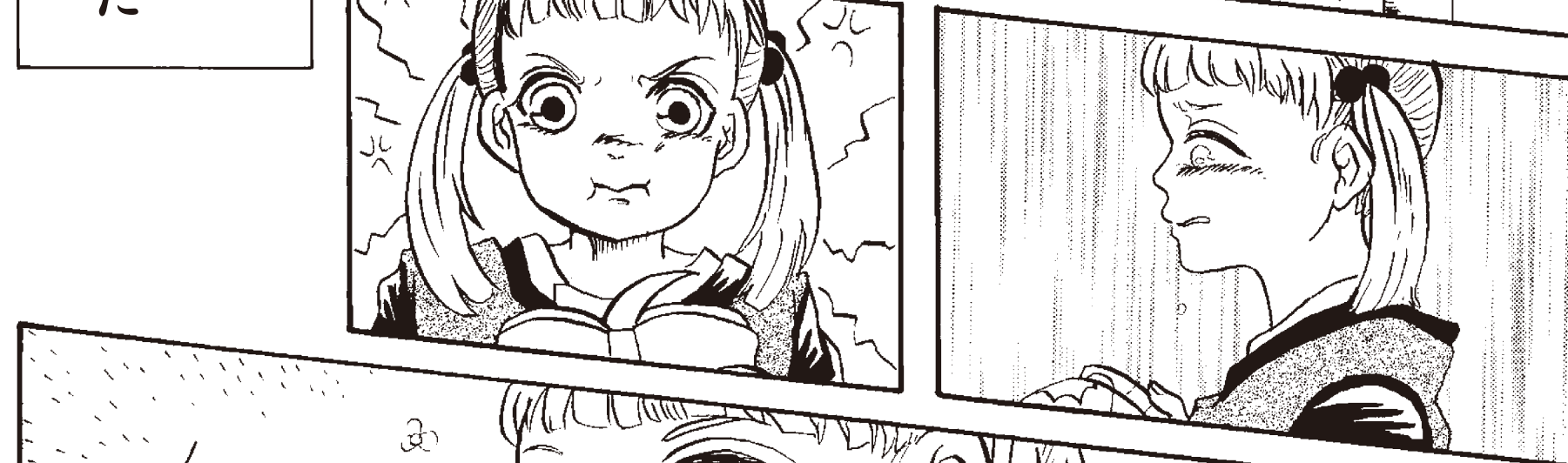
マンガ家への一歩を
着実に進んでいた



わたしは
マンガ家にな
る

マンガは
人に

夢と希望を
与えてくれるのだ



マンガ家になって
夢と希望を
たくさんの人に
与えたい!!

マンガ家になると
決めた小5の夏

ねえ
ママ
わたし
マンガ家になる

全部独学でやって来たので、話の作りは素人同然。画力は描いてれば上がるので、話作りに力を入れて行きたいです。担当さんはすごく優しく、親身になってくれるんですけど、ダメ出しも多い。指摘された部分を重点的にやっても、また別の部分を指摘されて、その繰り返しです。でも、そこがプロに一歩近づいた中で一番難しいところ。ここで心折れちゃう人もいます。

見た目から、よく少女漫画描いてそうって言われるんですけど、少女漫画は描けないんです（笑）。私が描くのはバトルもので、脳内バイオレンスっていうか、妄想の世界。基本的に四六時中妄想しています。バイト中が一番妄想がはかどります。ラーメン屋さんですけど（笑）。小学校の時からずっと妄想してたので、いつの間にか妄想しながら同時に色んなことができるようになっていました。漫画描きながら友達とも電話できるし、どこにいても妄想しています。

デビューしたら東京方面に行きたいなと思っています。アシスタント雇ったら近場じゃないと厳しいし。でも、多賀城から離れるのも実際は嫌なんです。歴史が大好きなので。多賀城は身近に歴史を感じられる場所もあるし、森とか山とか自然を描くのも好きで、車乗ってる時とかガン見しちゃいますね。一番好きなのが政庁跡。鹿寺も森に囲まれてるし、神社も好きです。実は今描いてる漫画が宮城県を舞台にしていて、多賀城も出てくるんですよ。

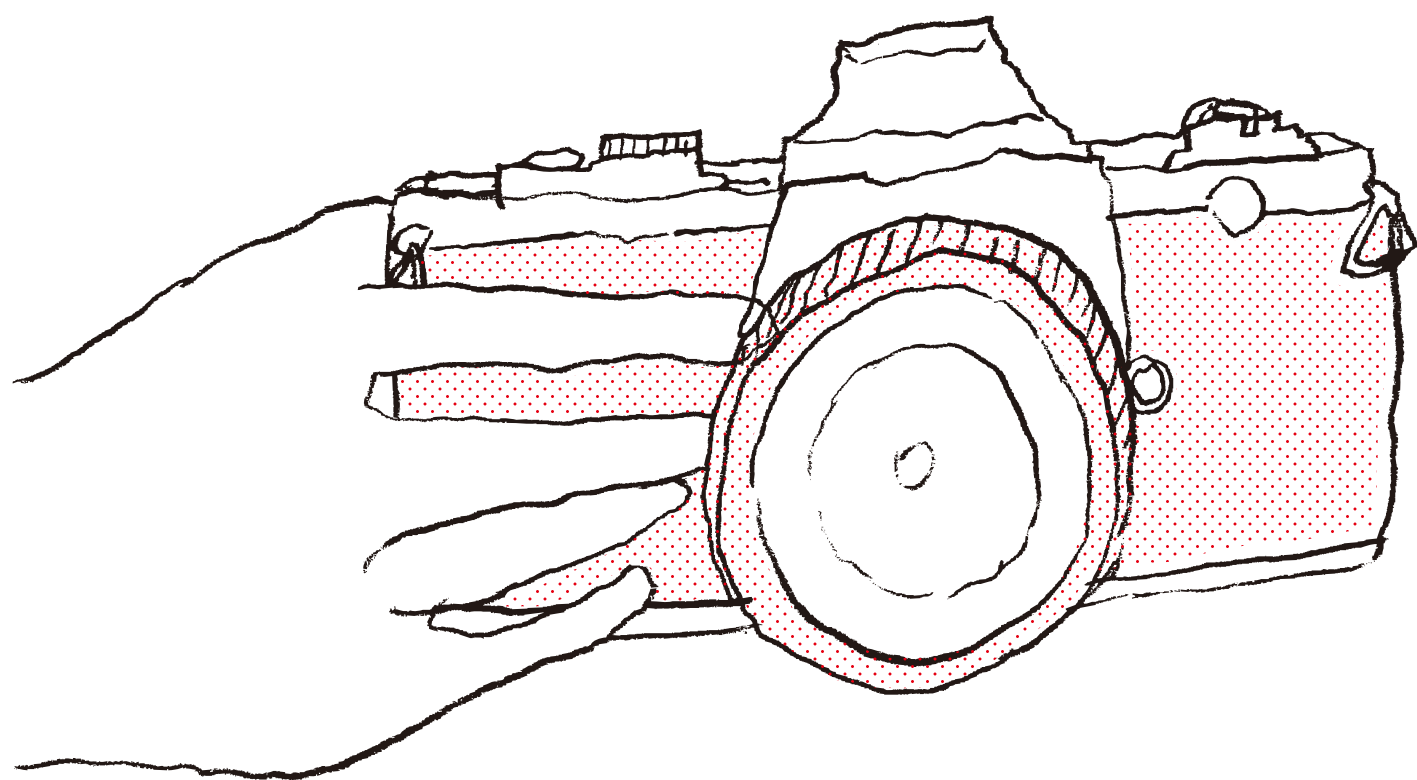
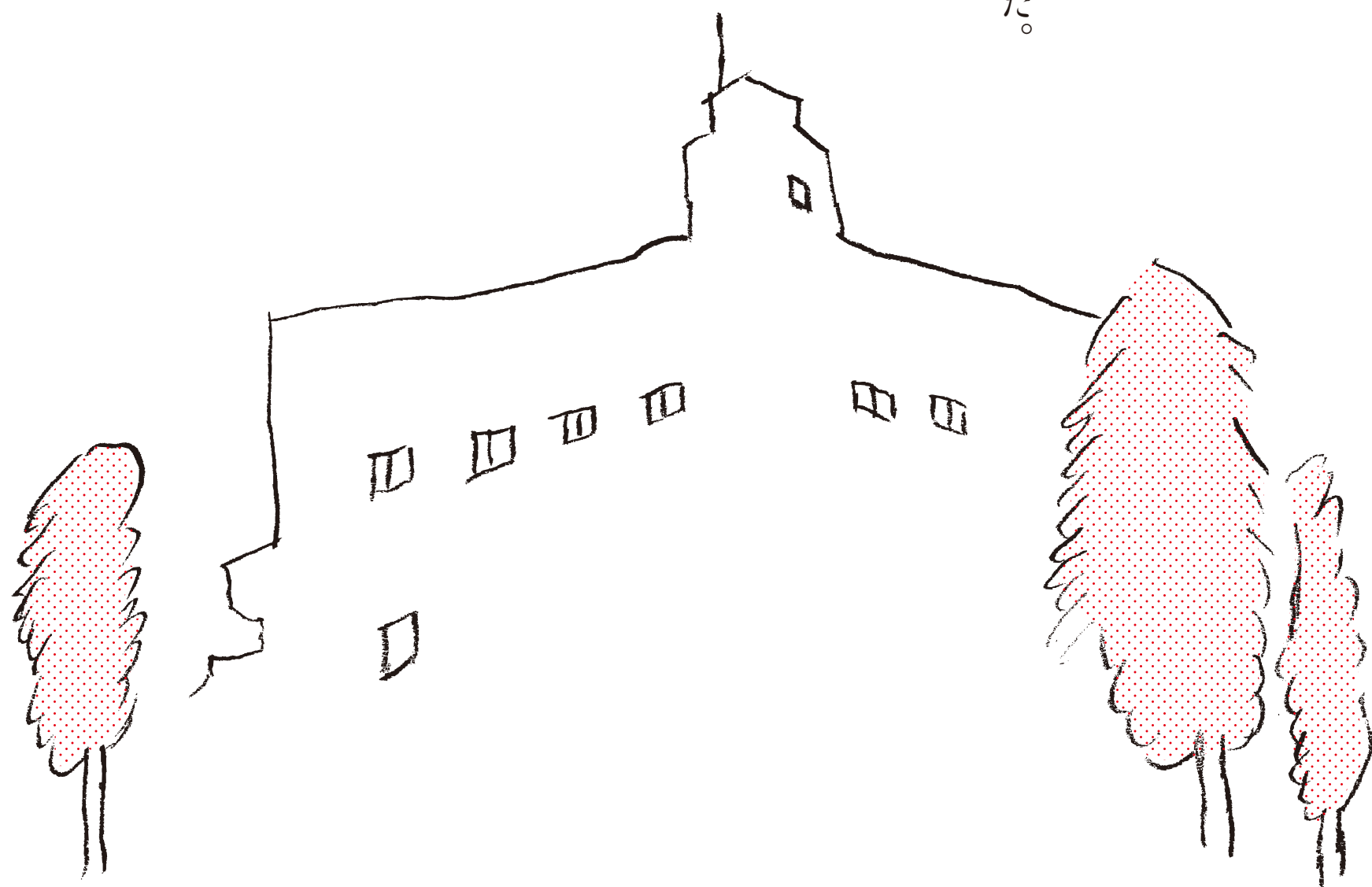
狭き門ですが、漫画家になることしか考えていません。昔からそれだけを信じて生きて来だし、自分から漫画を取ったら何も残らない気がして。何も残らないって言ったら自分に失礼ですけど、やっぱり絵を描いている時が本当に楽しくて。絶対自分はなってるんだっていう気持ちがあります。生まれ変わっても漫画家になりたいですね。



第12話 いつも写真はわたしに寄り添う

もともと文章を書くのが好きだった。でも、ある時ことばでは表現できない感情があることに気づいた。自分が想うことと、相手が受け取ることには、少しズレがある。その隙間を埋めるかのように、わたしはいつの間にかカメラを握っていた。

表現としての写真に憧れていたから、仕事にすることは抵抗や違和感があった。でも、社会人として生きて行くためには、もうこれしかない。そう気持ちの中ですり合わせて、スタジオカメラマンの職に就いた。



それから10年の歳月が経ち、わたしは結婚し、お腹に新しい命を宿していた。産休が明けたら職場に戻る予定だったけれど、1ヶ月後に東日本大震災が起きた。子供と離れたくない――。

仕事は長く休めず、結局2ヶ月で復帰したが、精神的にバランスを崩してしまった。1年間頑張った。でも限界だった。スタジオカメラマンは休日が繁忙期。子供の誕生日も休めない時がある。もう辞めよう。



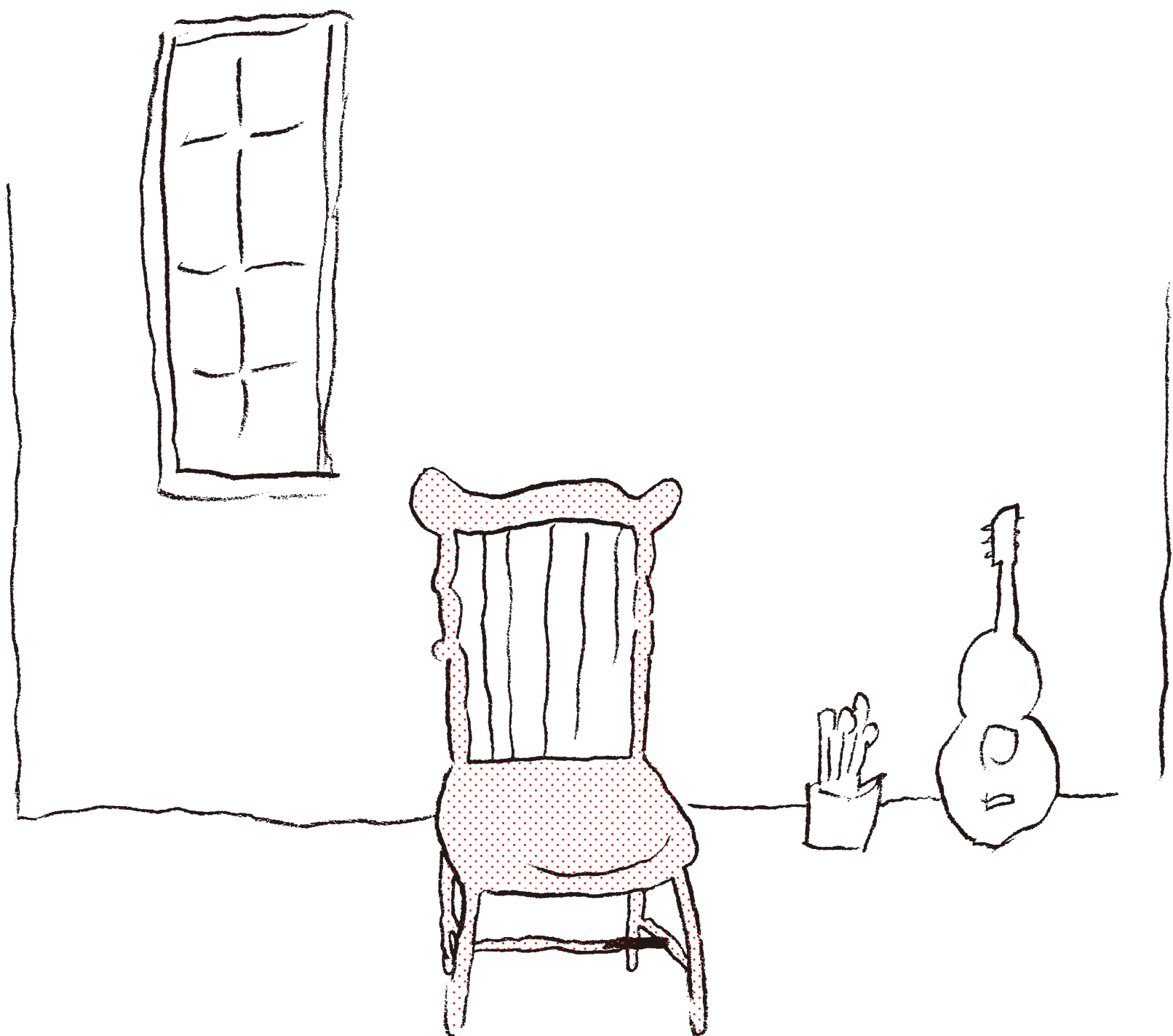
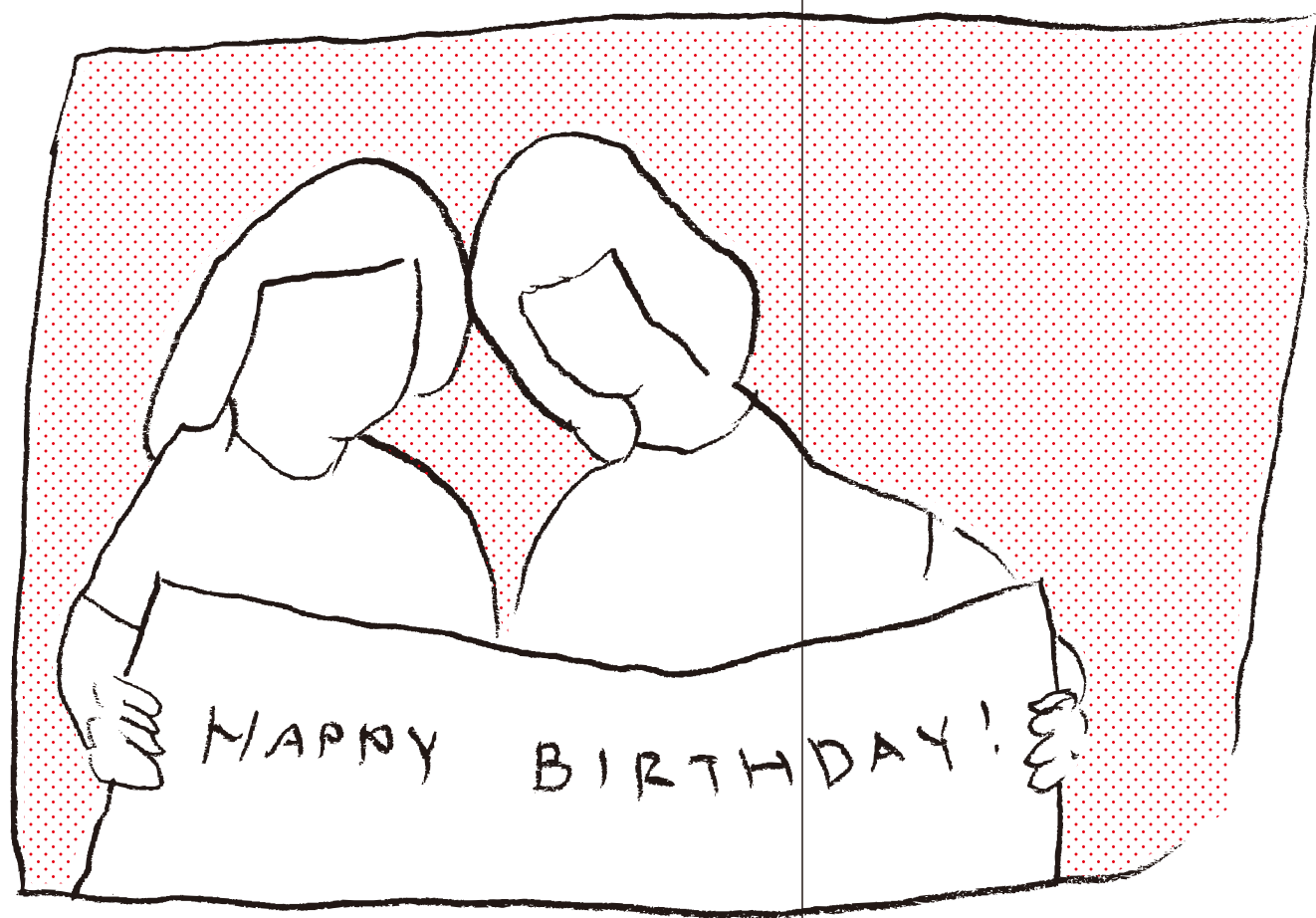
それでも、撮影の仕事は続けたかった。
夫が家に写真スタジオを作ることを勧めてくれて、
自分たちで壁を塗り、小さなスタジオが完成した。
志し高く、というより、
最初は避難場所だったのかもしれない。

結婚、出産、成長。

人生の節目節目にシャッターを下ろす。

「おめでとうございます」

が、最初にお客様に伝える言葉。



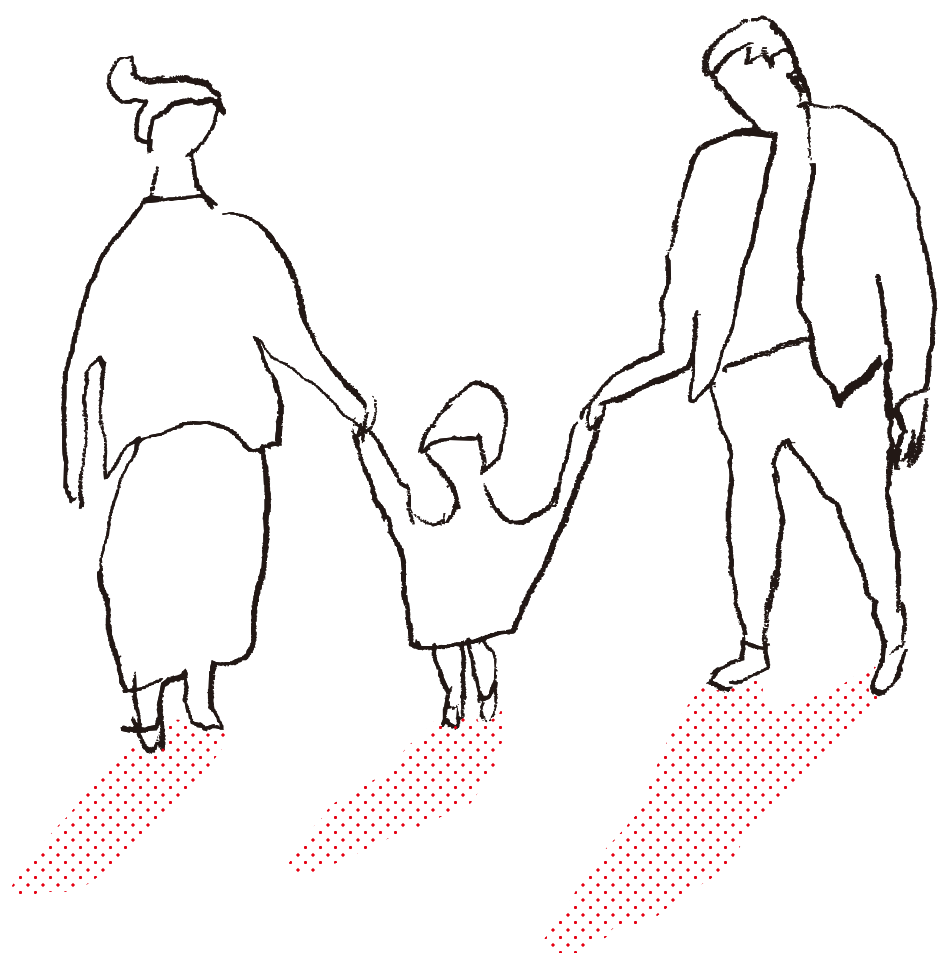
幸せな時間を写す仕事。

カメラマンは、誰かの喜びの瞬間を形にする仕事。

人とのコミュニケーションが苦手だったわたしは、

写真を介したつながりによって成長させてもらっている。

ああ、これがわたしがやりたかったことなんだ。



第13話 多賀城の守り神



陸奥国の国府があつた多賀城を象徴する遺跡は多々あるが、現在も形を留め伝統を受け継いでいる陸奥総社宮。総社とは簡単に言えば陸奥国（岩手県の南半分と宮城・福島）にある百社の神社をすべて集めたものだ。そもそも国府に赴任した国司の最初の仕事は国内の神社を巡って参拝することだったが、平安時代になると、国府の近くに総社を祀り、一箇所でお参りできるようになった。

神主である市川壽夫さんは現在71歳。塩竈市の生まれで、大学時代に出会った奥様との結婚を機に市川家に婿養子に入った。当時、大学工学部で学んだ金属の知識を活かし鉄鋼会社に勤めていたが、先代宮司が風邪で倒れ、ご祈祷ができなくなったのを目の当たりにし、「これは自分が継がなくてはならないのではないか」と48歳の時に思い切って転身したという。

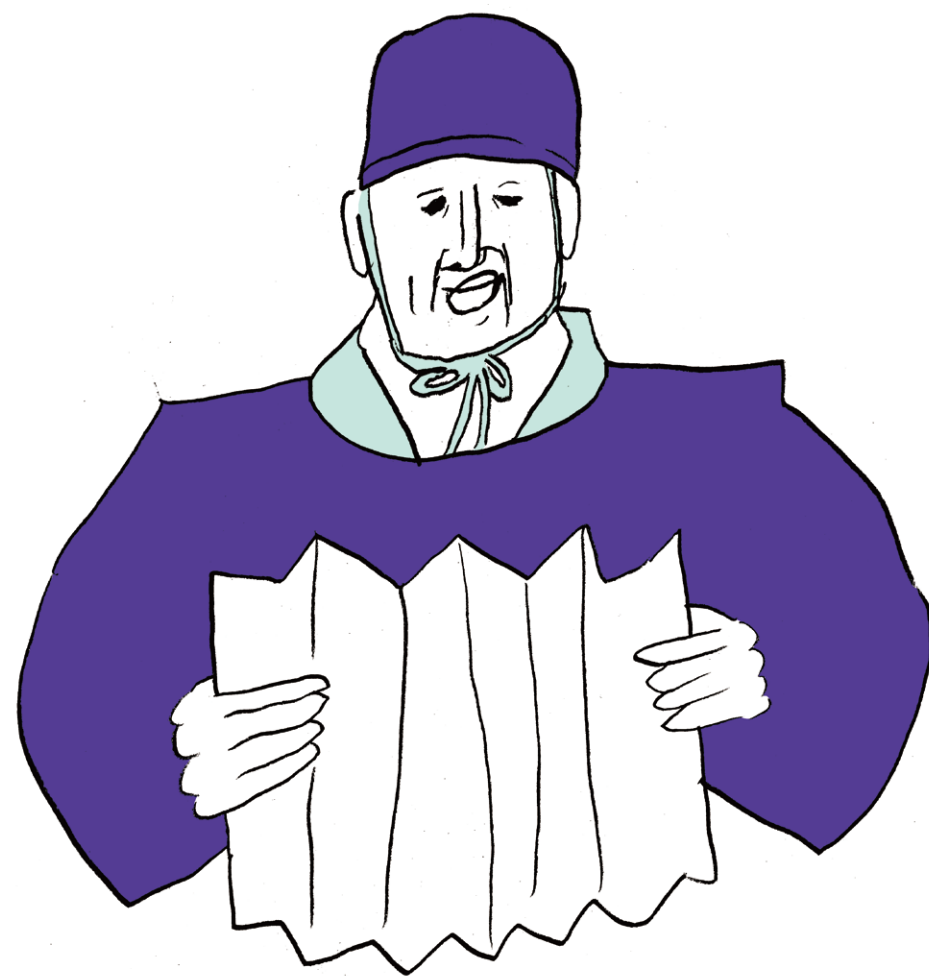
総社宮に限らず、信仰心の薄れ、最近では新型コロナウィルスの影響もあり、参拝客は減りつつある。「本来であれば、神社はみんなが集まる場所。コロナで集まれないことで、人と人との絆が断ち切られているような気がして仕方がない。そういうものを結び付けるのが神社の役割だと思っています」。市川さんはもどかしい思いを抱えながらも、神社を守って行くために様々な工夫をしている。例えば神社のウェブサイトを作ってわかりやすく魅力を発信したり、御朱印ブームをチャンスと捉え、息子さんの提案でオリジナルの御朱印帳も作った。御神木であるハクモクレンをあしらった美しいデザインだ。「初詣だけじゃなく、何かの折に触れて、気軽に来てもらえる場所にしたい」と、地域活動の中でも積極的に伝えている。



逆境の時代の最中ではあるが、市川さんは多賀城に対し「進化している町だと思っています。特に東日本大震災以降、現状よりもっと住みやすい町にしようという活気が見えるような気がします」と、常に新しいものを取り入れて、前に進もうという気持ちを感じているという。古いものを大事にするためには、新しいものを取り入れる勇氣も必要。神道には『常若（とこわか）』という言葉があるそうだ。常に若さを保つという意味で、例えば伊勢神宮の式年遷宮は20年に一度、伝統を維持するために行われており、これまで培われて来た技術を受け継ぐ意味も含まれている。「大事にするというのは放って置くことじゃないですね。積極的に維持するためには何かをやらないと続いているかない」。

実直なイメージの市川さんだが、意外にも趣味はカラオケ。「祝詞（のりと）の読み上げに役立つと言ってお酒を飲みに行って歌っています。中学校の同級生とワイワイ集まっていますが、ここ1、2年はコロナで全然行けていません。カラオケに行って一生懸命歌うと次の日は喉の調子がいいですね。我ながらいい声してるな、と思います（笑）」。

「多賀城にとって総社宮は守り神でありたい」と願う市川さん。古来より人と人を結び付けて来た場所を今日も守り続けている。



市川壽夫／陸奥総社宮神主。大学卒業後、日鉄建材株式会社に24年間勤務した。多賀城ライオンズクラブに所属し、民生児童委員も務め、地域活動に貢献している。趣味はカラオケ。



東京でも、京都でもなく、東北に

日本語を覚えてサラリーマンになるはずでした。私が大学に入学した1971年のオーストラリアは、今と全く違っていて、日本語ができる人はほとんどいませんでした。オーストラリアにとって日本は最大の貿易相手だったため、日本語を勉強すれば、サラリーマンになって高い給料をもらえるのではないかとこの幻想を抱いて進学しました。最初は文学部と経済学部の両方で学位を取ろうと考えていたのですが、数字が苦手だったのでほどなく経済学部は断念（笑）。高給取りのサラリーマンへの幻想はついたものの、せっかく日本語と日本文化を勉強したのだからと、当時の文科省が募集していた外国人留学生奨学金の試験を受け、国費留学生として日本に来ることになったのです。当時国費留学生は少なく、ほぼ希望通りの大学へ行ける時代でした。ほとんどの留学生が東京大学や京都大学を希望していた中、なぜ東北大学を選んだのか。東京に行ったら東京中心のものの見方しかできなくなりそうですよね。京都にいる外国人が日本を過度に理想化している姿を見て、これも違うべなど。だからそんなバィアスがかかった日本じゃなくて、ナマの日本を見てみたかった。それに、当時ハードコンタクトレンズをしていたので空気が汚いところは拷問だったから（笑）。

であれば東北しかないと決めました。



東北の歴史を探り始める

私が当時オーストラリアで読んだ日本史の研究書には東北の歴史についての記述がほとんどありませんでした。特に近世は「伊達騒動」だけ。明治維新时期に東北の諸藩は、西の諸藩に対して「後進的」と思われていたから研究対象として避けられていたのかもしれない。であればそこを探ってみようかと。歴史研究の穴場だから。でも、明治維新研究の壮大なマルクス理論を打ち立てている人たちには歯が立たず、尻込みしてしまった（笑）。

私が江戸時代の仙台藩を研究テーマにしたのはこれがきっかけ。それに、江戸時代は自分がまだ探っていない世界だったから。

第14話 東北の歴史へのこだわり

1974年に東北大学大学院文学研究科に入り、博士前期課程、後期課程へと進んだものの、なかなか納得できるような成果は出せずにいました。アメリカの大学で日本語を教えるという機会もあったため、アメリカに4年ほど行ってましたが、その間もずっと論文を書き続けていました。

論文は1986年に通りました。戦後、外国人が日本の国立大学文学部で通した初めての博士論文となり、それまで不可能だと言われていたものに風穴を開けた感じです。でも私がすごかったんじゃないんです。論文を書くのは簡単ではありませんでしたが、私の指導教官や同じ研究室の教官が一丸となり、東北大学の他の教授たちも私の研究のその価値、つまり、それまで誰も知ることのなかった東北の歴史研究を認めてくれたということなのだと思います。

45年前に私が自分の研究を始めた時は、ほとんど奇人扱い（笑）。研究室で仙台藩のことを研究していたのは私一人だけ。それが、いつの間にか仙台藩の研究は当たり前になりました。でも私が東北の歴史を変えたということではありません。東北の歴史は昔からきちんとここにあった。

こだわると見えてきた、他に誇れる歴史です。



J.F.モリス／1952年オーストラリア生まれ。オーストラリア国立大学アジア研究学部卒業。東北大学大学院文学研究科博士前期・後期課程。文学博士。宮城学院女子大学教授。著書に『近世日本知行制の研究』、『仙台藩「留主居」後の世界 武士社会を支える裏方たち』など。

実は外国人に対して拓かれた地域

宮城県民でこれを知っていたら超マニアなのですが、2007年に知事が日本で初めて『多文化共生社会形成推進』の条例を制定しました。前の年に総務省が「多文化共生して外国人と仲よくしましょう」という旗振りをしたのです。私は宮城県の多文化共生の形成の推進に関する条例の制定に関わっていました。その条例は日本で初めて外国人との関わりを定めたものでした。それが現在までも存続しているということ自体、宮城県民として誇れることです。あまり知られていませんが、多賀城市内のある公民館では、外国人技能実習生と地域の人たちが交流するといった全国的に見ても先進的な取り組みが行われています。



多賀城での美味しい暮らし

多賀城には1990年に仙台から引っ越して来ました。もう30年になります。女房は臨床心理士として病院に勤務しているのですが、子供が生まれたのをきっかけに、女房の職場の近くに住んで彼女が通いやすいようにしました。多賀城は実際に住んでみるとすごくいい。仙台の郊外から仙台駅に行くよりも、多賀城駅から仙台に行く方が圧倒的に近くて便利。成人した今も、うちの子どもたちは「都会に住みたくなかった」とはつきり言うんです。都会には緑がないし、空気が汚いし、人に酔う。そういう点で多賀城は子育てするのに本当に良いまち。そして、多賀城には美味しいお店がたくさんあります。MURATAのお菓子が特にお気に入りです。私の元気のもとです（笑）。